

2012 年度研究室活動記録

オープンラボ記録

本年度のオープンラボは例年とは異なり、平日に 2 回行いました。ゲストを招いたパネルディスカッションも実施せず、大学院生による研究室紹介と個別相談を中心に行いました。

<実施概要>

- ◆ 日時：2012 年 6 月 6 日（水）
15:30～17:00, 18:00～19:30
- ◆ 場所：東京大学教育学部 358 教室

<コース紹介>（15:30～17:00 の部）

山口香苗（社会教育学研究室）
足立涼子（図書館情報学研究室）

<コース紹介>（18:00～19:30 の部）

中村由香（社会教育学研究室）
茅野良太（図書館情報学研究室）

ワンデーセミナー記録

本年度も図書館情報学研究室と社会教育学研究室的交流を目的として、主に両研究室の修論生が研究内容を発表するワンデーセミナーが実施されました。

<実施概要>

- ◆ 日時：2012 年 9 月 4 日（火） 13:00～18:00
- ◆ 場所：東京大学教育学部 158 教室

<発表者>

13:10～13:50 高橋恵美子 「1950 年から 2000 年にかけての公立高校学校司書の職の確立過程（仮）—教科との連携と「図書館の自由」の視点から—」（図書館情報学研究室）
13:50～14:30 小守美和 「千葉県立高等学校における学校図書館および学校司書の役割（仮）」（図書館情報学研究室）
14:30～15:10 大山宏 「若者の地域活動にみる共同性の構築過程」（社会教育学研究室）
(休憩)

15:40～16:20 佐藤優 「ビジネス支援サービス導入に伴う 2000 年以降の公共図書館（仮）」（図書館情報学研究室）

16:20～17:00 石川洋行 「<自分探し>の歴史社会学——1980 年代の雑誌分析から」（社会教育学研究室）

17:00～17:40 加藤毅典 「三多摩地域における青年教育／コミュニティ活動動向研究概要報告」（社会教育学研究室）

2012 年度講義内容一覧

【生涯学習論基本研究Ⅰ】【生涯学習論特殊研究Ⅰ】担当：教授・牧野篤，准教授・李正連，講師・新藤浩伸

前期のゼミでは、宮原誠一・小川利夫をはじめとする著名な研究者の文献を読み、社会教育という学問領域が戦後からどのように発展してきたのか整理が為された。その中で、当初受講者が文献に書かれている内容を現代の社会をもとに考えてしまいがちであり、当時の研究者が何を考えていたのか考察することができていないことが指摘されたが、次第に文献に対し様々なアプローチがとられるようになり、社会教育という学問領域がどのようなものか、本質的な議論も行われるようになっていった。また、当時どのようなことが問題とされていたのかについて、「国家」という枠組みの意味について議論が為され、現在にどのようにつながるかを考察する契機となっている。

前期を通じて戦後からの社会教育の流れを追ったが、受講者は当時の背景や研究者の考えをどうとらえるかに試行錯誤しており、このことが成果であるとともに今後に向けての課題ともなったと言えるだろう。

【生涯学習論基本研究Ⅱ】【生涯学習論特殊研究Ⅱ】担当：教授・牧野篤，准教授・李正連，講師・新藤浩伸

本ゼミでは、主に 2 つの内容を扱った。
第 1 に、小川利夫の社会教育論に関するものである。本ゼミの前半では、前期に扱った小川社会教育論をさらに深めることを目的とし、『青年期教育の思想と構造：戦後青年期教育史論』（1978）と『教育福祉の基本問題』（1985）（ともに勁草書房）を輪読した。議論の際には、

刊行された当時の時代背景に即した文献解釈ができるようになることを目指した。

第2に、現代の社会教育論に関するものである。日本社会教育学会が50周年を記念してまとめた『講座 現代社会教育の理論』(2004)の3巻を精読し、近年議論されている社会教育学研究の動向について深めていった。

また、学外での活動として、文部科学省の主催する「長寿社会における生涯学習政策フォーラム2012 in 東京」へ参加し、高齢者の学習・社会参加活動をめぐって行政職員や実践者の方々と意見交換を行った。

【図書館情報学理論研究】担当：教授・根本彰

本ゼミでは、昨年に続きアメリカの図書館情報学専攻課程の大学院で図書館情報学概論の教科書として使われているRichard E Rubinの著書、Foundations of Library and Information Scienceを検討し、議論を行った。昨年扱った3・5・8・9・10章を除いた1・4・6・7章を扱って、英文とともに1次和訳版を比べ読みながら、訳の修正や内容の検討を行った。第1章 教育・娯楽・情報に関するインフラストラクチャ、第4章 情報の組織化：その技術と問題点、第6章 図書館の再定義：技術変化の影響と適用、第7章 情報学：サービスの見直しについて、の内容となる。受講者は担当部分の訳のチェックと内容の概要をまとめて報告し、その後議論する。今年度のゼミでは、図書館情報学の特に技術的側面を扱うことが多く、情報技術の進展とともに図書館情報学・図書館サービスそのものの変化をつかむことができた。

【図書館情報学研究方法論】担当：教授・影浦峽

本ゼミでは、各受講生の関心にもとづいてレビュー論文を執筆するという課題を設定し、これを通じて、学術研究において求められる様々なスキルの紹介と訓練を、主に受講生間で討議するという形式で行った。具体的に検討した内容は、(1)論文の探し方と情報検索ツール、(2)論文および書誌情報の管理のし方と管理ツール、(3)論文の読み方とメモの取り方、(4)概念整理と可視化のし方、(5)口頭での発表のし方、(6)論文構成に必要な要件と

構成のし方、である。また、これら諸点を検討する中で、説明および議論の形。式についての検討を実践的に行った。

【探究学習のための情報環境構築】担当：教授・根本彰

新学習指導要領において重視されている探究型学習について、今学期は学校図書館での生徒の学習を支援する学校図書館専門職員を中心に講義と議論が行われた。具体的には、最近の学校図書館法改正に向けての動きを踏まえ、日本の司書教諭免許制度、東出雲市や袖ヶ浦市における実践、フランスの読書教育とドキュメンタリスト教員についてなどを取り上げた。またゲストスピーカーとしてハワイ大学大学院図書館情報学専攻で教鞭をとるNoriko Asato氏とAndrew Wertheimer氏を招いて、ハワイの図書館員養成課程の現状についてのお話を伺った。さらに高等学校の学校図書館が、実際に授業とどのように関わっているのかについて、学校司書の経験のある院生2人の発表を聞いた。これらを踏まえ、東京大学教育学部附属中等教育学校の生徒による卒業研究でテーマ決めをする際に、相談役として支援をするアドバイザーを、授業履修者で務めた。

【言語メディア論】担当：教授・影浦峽

今年度は、メディア・リテラシーとは何か、という問いから出発し、全回を通して「知識」を構成するもの何か、「考える」ことを可能にする条件とは何か、などについても議論を重ねてきた。3.11に関する書籍、雑誌記事、新聞記事、ウェブ上の記事を題材に用い、文章の内部の論理構造と、外部知識の参照の二つの観点から、これらの文献を検討した。また、上記の文献でしばしば取り扱われるリスクの比較については、比較のパターンの列挙を行い、比較対象の妥当性の判定について議論し、相手を説得するために有効な比較・有効ではない比較、社会的に許される比較・許されない比較、などの観点から整理・検討した。

【ウェブ情報処理】担当：非常勤講師・藤井敦

講義と実習を通して、ウェブ情報処理における「情報検索」の理論と技術を習得した。講義パートでは、情報検索の基本事項(定義、構成

要素、情報要求との関係)の確認から始まり、形態素解析、索引語重み付け、検索アルゴリズム、フィードバックなどについてオーソドックスな理論・手法を具体例とともに概観した。実習パートでは、講義内容を踏まえて、実際に簡易的な情報検索システムを実装した。プログラミング言語 Perl を使い、索引語抽出、接辞処理、不要語削除、索引語重み付け (TF-IDF 法)、文書スコア計算といった機能を組み込み、XML 形式のテキストファイルと検索クエリを処理した。実際に手を動かし検索システムを作ることで、講義内容の理解が一層深まった。また本ゼミで学んだ理論・技術は、情報検索のみならず、分類・テキストマイニング等、他の様々な研究分野にも応用できるだろう。

【ネットワーク分析】担当：非常勤講師・安田雪

本ゼミでは、大きくわけて、講義、文献講読、グループワークという3つのことを行った。講義は、ネットワーク分析に関して初学者が多かったこともあり、基本的な用語や概念の意味から先生に解説をしていただいた。文献については、『Pajek を活用した社会ネットワーク分析』(Wouter De Nooy, Andrej Mrvar, Vladimir Batagelj 著, 安田雪監訳, 東京電機大学出版局, 2009) を用い、章ごとに発表担当を決め、本の内容に即して描画ソフト Pajek によって文庫に書かれていることを実際に視覚化し、パワーポイントでプレゼンテーションを行った。グループワークでは受講生を4グループに分け、グループごとに Pajek を用いて2部グラフを描画して共起関係の分析を行い、結果を発表した。新聞ごとの報道の比較分析や個人の体験についてアンケートを行った分析など、各グループが自由に設定したテーマの分析を通して、手法として用いたネットワーク分析について理解を深めた。

【社会教育学特殊研究】担当：非常勤講師・笹川孝一

本ゼミでは、福澤諭吉『学問のすすめ』を精読することを通して、社会教育学研究が歴史的に内包してきた問題点を明確にし、それを克服していくための方法論を構築するという目的のもと開講された。講義は原文に加え講師が作

成した現代語訳、論文を使用しながら、受講者が内容の要約、現代語訳の検討、内容への疑問点等を出し合い、全員で議論するという形式で行われ、特に福澤が検討文献を著した日本の時代背景や当時の東アジア諸国との関係を考慮に入れながら、福澤の国家論、文明論の特徴をとらえるとともに、「学問」、「実学」、「学者」等といった重要概念についての議論がなされた。ゼミの終盤には、福澤の思想や検討文献が持つ教育学的意義、歴史文献を読むこと・歴史研究を行うことの意義等が話題にあがり、文献の内容理解にとどまらず歴史文献の扱い方や研究視点の定め方なども学ぶことができた講義であった。

【図書館情報学論文指導】担当：教授・根本彰、教授・影浦峽

通称、「総合ゼミ」と呼ばれ、研究室所属の大学院生が各自の研究の進捗状況を報告し議論する場として、毎月1~2回開かれている。夏学期・冬学期ともに、各1回以上の発表の機会が設けられている。修士課程1年生は、学士課程で行った卒業研究の内容を報告したり、次年度からの修士論文の本格的な執筆に向けてのテーマ検討を行う。修士課程2年生は、修士論文の進捗報告が中心で、とりわけ冬学期は毎月発表を行い、執筆のためのペースメーカーとしている。博士課程は基本的に博士論文の進捗報告を行うが、それ以外にも学会発表の予行演習や、学術雑誌への投稿論文の添削がなされることもある。本ゼミの特徴は、内容面での議論もさることながら、発表形式や配布資料の構成と体裁、中・長期的なスケジュールの立て方など、研究遂行の方法論に関する多面的な議論や指導が行われる点である。本年度の大学院生の発表テーマは、図書館史、図書館経営論、計量書誌学、機械翻訳など多岐にわたっていた。

【生涯学習論論文指導】担当：教授・牧野篤、准教授・李正連、講師・新藤浩伸

論文指導ゼミは毎週開講され、修士論文構想・博士論文構想の報告や、学会報告原稿・学会投稿論文・紀要論文等の検討がなされた。ゼミの進行は、夏期・冬期にそれぞれ各自1回以上発表するように予定を立て、発表者は毎回資料を予めメールリストにて配布し、他の出席者は各自

それを検討した上でコメントをすることとした。報告の範囲は、「社会教育・生涯学習」というゼミの特殊性から非常に多様であるが、毎回各自の視点に新たな気づきを与えてくれるような闊達な議論が行われた。具体的なテーマとしては、(1) 中国・台湾・韓国の社会問題に関する研究、(2) 日本の若者・社会人など生き方をめぐる主体形成の研究、(3) 公民館・博物館・美術館・ホールなど、公共施設における社会教育実践に関する研究、(4) 家族・趣味など、人間の心を支える活動や関係性をめぐる研究、などである。論文指導では、「そもそもなぜそのテーマに興味を持ったのか」「今なぜそれを問う必要があるのか」という基本的な問いから入り、明らかにしたい点と論文題目の妥当性、理論的枠組み、研究方法、研究の意義など、論文を執筆する上で重要な視点を毎回確認することができた。

2012年度個人研究活動報告

(図書館情報学研究室 特任研究員)

[今井福司]

昨年度に引き続き、特任研究員として根本彰先生が研究代表者であるL I P E R 3プロジェクトの事務作業等を担当しております。今年度の研究成果としては、学校図書館史研究の成果として査読論文1本を発表しました。また、個人として関わっている東日本大震災支援プロジェクト saveMLAK と学校図書館支援について紹介する発表を1件行いました。このうち、査読論文「アメリカ公立学校カリキュラム改革における学校図書館－1920年代から1940年代までの改革と日本占領期における受容－」では、20世紀初頭のアメリカの学校教育におけるカリキュラム改革で学校図書館がどのように取り上げられ、それが1945年以降の占領期の日本においてどのように影響を与えたかを考察しました。来年度は今まで発表してきた査読論文をベースに、博士論文をまとめ、審査に出せるよう全力を挙げて取り組んで参りたいと思います。

(図書館情報学研究室 博士課程)

[河村俊太郎]

今年度も昨年度に引き続き、東京帝国大学の図書館史を中心に研究をすすめ、「東京帝国大

学図書館組織内における附属図書館の位置づけ－そのモデルの検討を中心に－」という論文が日本図書館情報学会誌の58巻2号に掲載されました。この論文では、大学及び図書館の組織の中における東京帝国大学附属図書館の役割についてそのモデルや実際の運営から検討し。図書館のモデルにはアメリカ型とドイツ型の大きく分けて二つあったが、東京帝国大学では中央と部局が切り離され、価値ある図書のみを収集し教育的な図書は収集されていないという、ドイツ的な図書館経営が行われていたことを明らかにしました。その他、レファレンススキルの向上を目的として共著者とともに開発したEラーニング・ゲーム RefMaster についての論文が情報の科学と技術に掲載され、世論調査分析の研究が日本行動計量学会において発表されました。

[崔英姫]

博士論文のテーマは、高校の探究型学習における学校図書館の役割についてであり、具体的には、東大附属中等学校をフィールドにしたイノベーション科研の中、根本彰先生が研究代表者として総括している「探究科研」に参加し、東大附属学校の卒業要件として高校生が遂行している卒業研究を、探究型学習と関連づけ、その体制や実態について研究しております。2012年度には、執筆者(生徒)全体を対象にアンケート2回や教員向けのアンケート1回を実施し、その分析内容を探究科研の研究会で発表しました。

なお、今年度から参加した「子どもの読書活動と人材育成に関する調査」では、読書政策・学校教育・探究学習・学校図書館などを視野に入れた研究を進め、愛知県の読書活動推進活動に関する聞き取り調査と、韓国の読書政策についての調査及び報告発表を行いました。

[浅石卓真]

中学・高校の理科教科書の文体について研究しています。従来の教科書研究は内容分析が殆どで、実際に学習者が目にする形式的な側面は軽視されてきました。博士論文では、科目、学年段階、時代に応じた理科教科書の文体的特徴を明らかにすることを目的としています。これらのうち、学校教育高度科センターのプロジェクト

クト研究として行った、学習指導要領で区切った時代別の教科書の文体の分析結果を、3月に報告書としてまとめました。また、6月からは財団法人中央教育研究所から教科書研究奨励金をいただき、高校の物理、化学、生物、地学における文体比較を行っています。その成果は学術雑誌に来年掲載予定です。さらに今年、理科教科書についてのレビュー論文を東京大学大学院教育学研究科紀要にまとめました。来年は、修士時代での研究を、学年段階に応じた文体的特徴の変化としてまとめ直すと共に、これまでの成果をまとめて博士論文にする作業に取り組みたいと考えています。

〔蘇懿楨〕

昨年度の研究計画を少し方向を変わって、台湾の小学校における読書活動の歴史と現状を研究テーマにした。読書活動の歴史を探求するため、まずカリキュラムに直接に関わった小学校課程標準（学習指導要領に相当）を分析することをを行った。そこで、戦後の1949年から現在までの小学校課程標準を集め、国語科の部分を出し、合計8回の修正があった。1990年代以降の課程標準を入手するのは難しくないが、その以前のはなかなか手に入れない。作業は帰国期間しかできないため、資料を集めるのに結構手間暇をかかった。また、昔の文献には、参考や引用文献を詳細に記述していないものが多数であり、時々困っていた。現在、全ての小学校課程標準を入手し、分析を行っているところである。今年中、この分析結果を論文にまとめて投稿したいと考えている。

〔図書館情報学研究室 修士課程〕

〔井田浩之〕

本年度は、2011年3月に『探究学習と図書館』（学文社）が共同研究の成果として上梓されたこともあり、個人研究（修士論文）に専念する一年となった。大学図書館を対象に、「情報リテラシー」「大学教育」の動向を整理し、大学図書館の機能である「教育支援機能」と「研究（専門教育）支援機能」に情報リテラシーがどう関与するかをインタビュー調査で体系化した。まず、3大学図書館への図書館員にインタビュー調査を実施する中で、現在、初年次教育をはじめとした「教育支援機能」には貢献で

きているが、「研究（専門教育）支援機能」の側面に課題があることが見えて来た。日本において、研究環境、研究指導方法と図書館がどう関連しているのか。第二段階として研究者へのインタビューを実施した。その結果、図書館の位置づけも領域によって異なることから、ニーズ分析を実施し、日本型の情報リテラシー科目を再構築していく必要性を論じた。

〔小守美和〕

本年度は修士論文「千葉県公立高等学校における学校図書館の役割—県立高等学校2校を事例として—」の執筆を中心に研究を行った。千葉県ではどのような職員が学校司書として学校図書館の業務を担っているのかを整理し、実際の高校を事例に学校の中で学校図書館がどのような役割を果たしているのかを明らかにした。事例として扱った県立長生高校、県立勝浦若潮高校では学校司書、司書教諭、教務主任、教諭にお話を伺い、多くの示唆を得ることができた。長生高校ではSSHに指定されたことで、学校図書館を利用した課題研究を行うようになったが、それが他の科目の学校図書館の利用に影響を与えているとは言い難く、そこには授業において効率性が求められるという進学校であるがゆえの苦悩があった。勝浦若潮高校では、総合学科の専門性の高い授業を支えるための学校図書館の役割を明らかにできた。今後は、この研究で得られたことを自分の仕事に活かしていきたいと思う。

〔佐藤優〕

本年度は修士論文の執筆と、ゼミに参加する一年となった。修士論文は公共図書館におけるビジネス支援サービスというテーマに絞り、ビジネス支援サービスとは何か検討することとした。論文の主眼はビジネス支援サービスを行っている図書館の蔵書について調査を行い、ビジネス支援サービスを行っている図書館と行っていない図書館の蔵書の違いについて検討を行うというものである。先行研究ではNDC分類別に蔵書を検討するものが多く主題別に検討しているが、論文では分類コードを用いて読者対象別に検討を行った。ゼミでは、修士論文の進捗状況について発表し、貴重な意見をい

ただいた。この一年は修士論文を中心としさまざまな意見を頂いた。本当に感謝している。

〔高橋恵美子〕

本年度は修士論文「1950年から2000年にかけての公立高校学校司書の図書館実践」執筆のための研究活動が中心となった。元公立高校学校司書の方へのインタビューや文献調査を行った。1950年代、学校図書館担当事務職員として出発した学校司書は、1970年代に入ると、一般教員の図書館離れが進むなか、学校図書館の仕事全般を担うことになっていく。レファレンス・サービスの蓄積があることで教科の授業と学校図書館の連携につながり、教科の授業に効果的に関わるためには、司書の判断による選書の実現が必要だった。また学校図書館に予約制度を導入するうえでも、司書の判断による選書が実現することが重要だった。また「図書館の自由」に関する禁書問題（愛知県・千葉県）、貸出方式、予約制度導入において、学校司書の果たした役割は大きい。学校図書館における「図書館の自由」とは、学校図書館に固有の教育的機能を与えるものでもあった。

〔足立諒子〕

大学院に入学し初めての一年です。新しい環境になったこともあり、勉強・研究について考え直す機会が多く、新しい手法を試したり失敗したりと、試行錯誤の時期となりました。今年度の活動は、卒業論文（「日英並列コーパスからの訳語の自動獲得：図書館・情報学分野を対象に」）の振り返りから始めました。前期は、図書館情報学研究方法論ゼミで、言語横断検索のレビュー論文の執筆に取り組みました。また同時に、文献調査の仕方、ノートの取り方、文献管理の方法、計画の立て方など、研究活動を支える基本的なテクニックを見直し、自分なりのスタイルを確立するよう努めました。夏期休暇から修士論文のテーマ探しを始め、これまで「情報検索におけるレレバンス概念」について、基本文献の収集を行ってきました。これからリサーチ・クエスチョンを設定し、研究手法を検討していきます。今年度中には、研究計画を立てる予定です。

〔茅野良太〕

今年度行ったことは、修士論文の執筆の準備となる、以下の2つの活動である。

(1) レビュー論文の執筆：既存研究の理解および自身の関心の明確化のために2つのレビュー論文を執筆した。まず1つは、これまでなされてきた情報メディアの実証的研究を、観察の対象と観察のレベルという2つの視点において整理し、メディア研究の現状を把握するものである。さらにもう1つは、上述の整理によって浮き彫りになった特定の対象・レベルの研究群に焦点を当て、既存研究が扱ってきたメディアの種類、メディアの形態上の観察点、用いられている変数、および研究目的について整理を試みるものである。これら2つのレビュー論文で明らかになった点をもとに、修士論文のテーマ決定を行う。

(2) 勉強会への参加：図書館情報学研究のために必要でありながらも現行のカリキュラムでは欠けている知識・技術を習得するために、数学および機械翻訳の勉強会に参加した。

〔宮田玲〕

本年度より図書館情報学研究室修士課程に入学しました。昨年の卒業論文では、日英機械翻訳の改善のための日本語制限ルールの構築と評価を行いました。今年は共同研究にて、地方自治体（愛知県豊橋市）ウェブサイトの文書を対象とした、日本語文の書き換えとその評価を行っています。どのように原文を書き換えると、機械翻訳の精度が改善し、さらに文の読みやすさが向上するのかについて、主に制限言語やテクニカルライティングの枠組みから検証しています。研究成果の一部は、3月の言語処理学会等で発表する予定です。今後は、プログラミングなどの技術を身につけつつ、これまでの成果を応用して、自治体文書の多言語化を支援する執筆ツールの開発を進めていきたいです。

（社会教育学研究室 特任助教）

〔荻野亮吾〕

2012年1～12月における研究・活動内容を報告します。

（翻訳書）

1. 『成人のナラティブ学習：人生の可能性を開くアプローチ』（マーシャ・ロシター、M・キ

- ャロリン・クラーク編, 立田慶裕・岩崎久美子・金藤ふゆ子・佐藤智子と共訳) 福村出版, 2012年10月.
(論文)
2. 「企業と大学のeポートフォリオの開発と活用」『文部科学教育通信』Vol.292, 2012年5月, pp.22-23.
(報告書など)
 3. 「『やねだん』の取り組み: 鹿屋市串良町柳谷集落における地域づくり」「上久堅における地域づくり: 長谷部三弘氏の活動から」牧野篤(研究代表)『つながり・循環・生成: まちづくりと文化を考える(科学研究費補助金挑戦的萌芽研究『生涯学習をベースとした領域融合的な実践科学としての「文化工学」の創成』研究報告)』2012年3月, pp.285-298.
 4. 「2011年社会教育研究の動向」『日本社会教育学会紀要』(古壕典洋・満都拉・中村由香・園部友里恵・都甲友理絵・山口香苗・石川洋行・加藤毅典と共著) 第48号, 2012年6月, pp.142-151.
 5. 「飯田市の分館を捉える視点」東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室 飯田市社会教育調査チーム「自治を支えるダイナミズムと公民館: 飯田市公民館分館活動を事例として」『学習基盤社会研究・調査モノグラフ』第4号, 2012年8月, pp.12-21.
 6. 「公民館をめぐる政策の動向」(佐藤智子と共著)『日本公民館学会年報』第9号, 2012年12月, pp.163-166.
(学会報告)
 7. 「分館調査から見えてきた 飯田市公民館の特徴と課題」(牧野篤・新藤浩伸・中村由香と共同)日本公民館学会 2012年度7月集会, 2012年7月, 飯田市竜丘公民館.
(学会活動・社会的活動)
 8. 文部科学省平成24年度優良PTA 文部科学大臣表彰審査委員(2012年7~9月)
 9. 独立行政法人国立青少年教育振興機構「子どもの読書活動と人材育成に関する調査」に係る研究会委員(2011年9月~)
 10. 東京大学・(株)和井田製作所ものづくりプロジェクト MONO LAB JAPAN 事務局(2011年4月~)
 11. 国立教育政策研究所 生涯学習政策研究部プロジェクト研究「生涯学習の学習需要の実態とその長期的変化に関する調査研究」研究会委員(2010年5月~)
12. 日本社会教育学会 研究担当幹事(プロジェクト研究「社会教育としてのESD」担当, 2009年9月~)
(社会教育学研究室 博士課程)
[古壕典洋]
2012年度(1月~12月)の研究活動は、以下の通りです。
(論文)「社会通信教育における『へだたり』に関する考察—生成期の議論に注目して」『日本社会教育学会紀要』第48巻, 2012, pp.11-20.
(論文)「制度創設期における大学通信教育の性質についての考察—『スクーリング』という存在を手がかりに」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第51巻, 2012, pp.135-144.
(報告書)「龍江地区の調査結果」「箕瀬町三丁目自治会における公民館活動について」『自治を支えるダイナミズムと公民館—飯田市公民館分館活動を事例として』(学習基盤社会研究・調査モノグラフ第4号) pp.56-64. pp.70-75.
(学会発表)「初期遠隔教育論における“distance”の意義—形態論から行為論への転換過程に注目して」日本通信教育学会第60回研究協議会, 特別研究発表。
[豊田香]
本年度の研究活動を以下の通り報告します。
1. 論文
東京大学大学院教育学研究科紀要第52巻 『専門職大学院ビジネススクールで扱う知識の性質についての考察—学術知と実践知の関係性の視点から—』2013年3月発行予定(単著)
 2. 学会発表
①2012/3/8 日本発達心理学会第23回大会(名古屋国際会議場)(単) 会員企画ラウンドテーブル 登壇者『時間とともにある変容、変容とともにある時間—発生の三層モデル(TLMG)』「TLMGと変容の語りの接合の試み」
②2012/9/1 日本質的心理学会第9回大会(東京都市大学)(単) 会員企画シンポジウム企画・登壇者 『制度的な組織の境界を超えた繋がり, 活動, 学習による個人の準抛枠の変容をTEM/TLMGで描く』「企業と専門職大学院を行き来する社会人大学院生に起きる変容と葛

藤を描く」

3. 調査活動

- ・調査対象のビジネススクールの現役生 5 名から経年調査を実施。
- ・修了生から、学びの経験の語り（ヒアリング）を実施。
- ・IT 関連企業と実務家教員が計画する人材育成研修を共同でデザイン・実施・データ収集。
- ・ビジネススクールに人材育成として社員を派遣する企業担当者へのヒアリングの実施。
- ・ビジネススクールにおける授業開発の試みを参与観察。

〔満都拉〕

本年度における主な個人研究活動は下記のとおりである。1.中国の全日制専門職大学院制度の性質と今後のあり方を検討した論文を執筆し、東京大学大学院教育学研究科紀要に投稿した。2.中国の大学生の大学院進学 of 動機・理由を明らかにすることを目的に、現役大学院生 19 名を対象にインタビュー調査を行った。その結果を日本教育社会学会第 64 回研究大会で発表した。3. 留学動機や留学後の生活・勉学、留学終了後の進路といった 3 つの視点から、高校卒業後に来日した中国人留学生 9 名のデータに対して再分析を行い、それが大卒者と社会人の留学生といかなる共通点と相違点を持つのかを検討した。その結果をアジア教育学会第 7 回大会で発表した。上述以外に、昨年度に引き続き、日本教育学会特別課題研究委員会の最終報告書のうち「日本を生きる中国人留学生の現状と課題」(p.70-99) と、牧野研究室と長野県飯田市民館との共同学習プロジェクトのモノグラフ 4 の一部 (p.27-31、p.76-78) を分担執筆した。

〔中村由香〕

本年度行った研究は、以下の通りです。
(論文・共著) 「地域における社会的ネットワークの形成過程に関する研究：飯田市における分館活動を事例として」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 52 巻、印刷中。
(報告書・共著) 『自治を支えるダイナミズムと公民館：飯田市民館分館活動を事例として』(学習基盤社会研究・調査モノグラフ 4)、2012 年 8 月。

(学会発表・単独) 「地域のネットワーク構造を巡るジェンダー差の分析：長野県飯田市を事例として」日本社会教育学会第 59 回大会、2012 年 10 月。

(学会発表・共同) 「分館調査から見えてきた飯田市民館の特徴と課題」日本公民館学会 7 月集会、2012 年 7 月。

〔侯婷婷〕

今年の個人研究について、農民工子女教育と 1980 年代半ば以降の中国教育改革・発展との関連性に関心を持ち始め、研究を進めていた。教育改革・発展(特にその中核である教育体制改革)の例年の変遷を踏まえた上で、農民工子女教育をめぐる新しい動向を追いつつ、近年、上海市政府はいかなる取り組みを取ったのか、具体的にいかなる方式を用いて実行に移していたのか、どのような歴史的経緯があるのか、について考察・論文執筆しました。共同研究について、8 月に社教研究室の留学生研究に参加し、「日本を生きる中国人留学生の現状と課題」を分担執筆・口頭発表をしました。今後、より視点を広めて研究を続けたいと思います。

〔娜仁高娃〕

今年度は主に行った研究活動は以下の通りである。
中国建国以後のメディアにおける教師・生徒関係をめぐる認識の変遷、つまり「教育的関係」論の変容およびその社会学的根拠を明らかにする研究を継続している。関連資料を蒐集しながら、教師・生徒関係の変遷の実態をより正確的に把握ために研究方法として教師に対するインタビューの検討をも視野に入れた。② 2010 年度中国で提出した博士論文『『界に生きること』—現代中国基礎教育におけるブルデュー「界」概念の適用』について、「教育的な関係」に関する議論を取り上げて、リライトを試みた。③日本におけるブルデュー研究に対する関心が深まってきた。中国におけるブルデューの研究と比較分析するために、80 年代半ば頃から日本においてブルデューをタイトルや主題にした論文を中心に概括してみた。

〔丁健〕

本年度は、主に次の研究活動を行った。

<個人研究>

(論文) ①「1930年代におけるアメリカの对中国社会教育支援—ロックフェラー財団の活動を中心に—」, アジア教育学会, 『アジア教育』第6号, 2012年10月, 37~49頁。

(論文) ②「近代中国における図書館職員養成機関の設立—武昌文華図書館学専科学校—」, 東京大学大学院教育学研究科紀要, 第52巻, 2013年3月発行予定。

(学会発表)「民国期におけるキリスト教の中国郷村建設運動に関する一考察」教育史学会第56回大会, 2012年9月。

<共同研究>

①日本教育学会特別課題研究委員会の最終報告書の一節「日本を生きる中国人留学生の現状と課題」を分担執筆した。

②東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室 飯田市社会教育調査チーム「自治を支えるダイナミズムと公民館：飯田市公民館分館活動を事例として」『学習基盤社会研究・調査モノグラフ』第4号の一部を分担執筆した。

〔山口香苗〕

今年度の研究活動は以下の通りである。

<個人研究>

1. 民主化後の台湾における市民社会実現のための取り組みとして社区大学の役割に注目し, 考察するための研究を進めた。特に社区大学設立の歴史的背景, 理念を探るための資料収集を行った。

2. 昨年度提出した修士論文を加筆修正しコース紀要に掲載された。「1920年代における台湾知識人の教育に関する主張とその活動—植民地期の民族雑誌記事を中心に—」(紀要第37号)。

<共同研究>

1. 飯田市公民館調査に参加し, 分館役員やサークル活動を行っている地域の方々への聞き取り調査を行った。

2. 東アジアからの留学生の自己変容をとらえる「留学生研究」プロジェクトに参加し, 留学生へのインタビュー, 日本教育学会特別課題研究委員会最終報告書『東アジアの教育—その歴史と現在—』の論文執筆, 並びに第71回日本教育学会で共同発表(中国人留学生担当)を行った。

〔金宝藍〕

本年度2月に韓国・公州大学大学院(修士)を修了し, 本研究科に入学する前までは修士論文をまとめ, 次のようなことを行なった。修士論文報告としては, 韓国教育学会 post session、東アジア平生教育研究会、公州大学大学院学術論文発表大会、平生教育実践研究共同体研修会において行い, 論文に関する内容の一部掲載としては, 教育福祉国際学術シンポジウム資料集に小論(知性平等論の自己教育運動的合意—ランシエールの「普遍的教え」論を中心に)を掲載した。さらに, BK教育福祉研究所・韓国教育農村教育研究所が共同で組織した日本農村教育調査チームに関わって, 沖縄現地調査などを通じて調査報告書の作成を行った。入学後は, 日本での勉学に慣れながらひとまず幅広い視野を持つために, 多様な研究会に参加して視点を広げようとした(ESD研究会、韓国生涯学習研究フォーラム、東アジア社会教育研究会—『東アジア社会教育研究第17号』「韓国の平生教育この1年」執筆に参加)。そして, 実際に社会教育実践現場から学び, 共同調査の仕方や研究方法論を身につけるために, 社会教育研究室の共同研究である長野県飯田市の分館調査と石川県内灘町の公民館調査に参加している。個人的には「市民的リテラシー」の意味の再構成やその形成過程を明らかにすることに関心を持っているため, いままでの研究を踏まえて関連資料を収集・検討しながら理論的論理を補完する作業をしている。その他の活動としては, 日韓社会教育学術研究大会(1月)や日韓社会教育セミナー(8月)で通訳、翻訳活動を行って, 社会教育分野での日韓学術研究交流の架け橋の役割を果たそうとしている。

〔大山宏〕

今年度は社会教育という領域において青少年を対象とすることがどのような意味を持つのかを検討し, 先行研究の取りまとめを行うとともに, 昨年度関わった事例の再検討を行いました。また, その内容を取りまとめ, 社会教育学会研究大会で発表を行いました。

共同研究では柏市高柳地区・内灘町・飯田市を訪問し, 各地域の人々と交流し, 今後の地域のあり方について検討してきました。高柳地区

では夏祭りなどに参加して地域住民と関わった他、児童センターと協力して地域の子供向けのイベントを開催しました。また内灘町では各地区の公民館を回り、それぞれの地域において公民館を基盤とする対人ネットワークがどのように形成されているのか調査を行いました。飯田市でも公民館を対象とし、利用者である地域住民の方々に対する聞き取り調査を行いました。

来年度は今年度の研究方針を継続するとともに、具体的な事例の調査・検討に入っていきたいと考えています。

〔園部友里恵〕

1. 修士論文をベースとした学会研究発表

昨年度執筆した修士論文「劇場がもたらす地域社会の変容―日常性・非日常性という視点から―」をベースとした研究発表を日本社会教育学会、日本アートマネジメント学会において行った。

2. 高度化センターの院生研究プロジェクトへの参加

今年度より学校教育高度化センターの院生研究プロジェクトに関わっており、長野県・木島平村においてコミュニティ・スクールに関する調査を実施している。

3. 博士論文の構想

今年度は博士論文の構想について深める年でもあった。現在、特に1970年代のブラジルにおける民衆演劇運動に関心を抱いており、今後、現地調査も含め研究を進めていく予定である。

4. 実践活動（インプロ・ワークショップ）

公共劇場「座・高円寺」でワークショップファシリテーターを継続してつとめている他、8月には柏市高柳地区との連携事業「東大キッズセミナー」においてもワークショップを実施した。

〔都甲友理絵〕

今年度より博士課程に進学し、地域社会におけるミュージアムの役割について、来館者とミュージアムをつなぐ活動を担うボランティアを主な対象として、次の研究活動を行った。(1) 修士論文「ミュージアム・ボランティアの学びに関する研究―美術館ボランティアの語りから

みる活動に注目して―」のフィールド調査の箇所を中心に加筆修正し、日本ミュージアム・マネジメント学会第17回大会にて発表した(2012年6月)。(2) 日本社会教育学会のプロジェクト研究「社会教育としてのESD」定例研究会に参加しながら、個人の研究関心である、まちづくりやエコミュージアム研究における住民論についての関連資料を蒐集している。共同研究としては、飯田市公民館調査研究チームに参加し、分館を取りまく団体等を対象にインタビュー調査を行った。

また、今年度より、国立教育政策研究所教育課程研究センターにて、全国学力・学習状況調査に関わる学力調査専門職として勤務している。

（社会教育学研究室 修士課程）

〔田村栄作〕

興味を持っているテーマは「地域の中の博物館の在り方～地域連携による博物館活性化の仕組み～」であり、最終目標としては、博物館活性化を行うための組織設立の可能性と妥当性を検討し、適当と判断される場合はNPO等を実際に設立するところまで目指したい。今迄、博物館を中心とした活動現状と課題及びニーズの把握、博物館への支援活動の現状、更には博物館の存在意義等について調査研究を行ってきた。また、地域全体の中の博物館在り方、地域の住民・諸施設との連携の在り方に関する調査を行ってきた。今年度は更に進めて、具体的な事例について詳細調査することにより、本研究で目指しているNPOの活動内容を明確にし、設立に向けて準備をした。具体的には1) エコミュージアムというコンセプトで活動している組織への訪問、2) 地域再生活動を行っている組織への訪問を行った。今後の研究の方向性としては、地域の中の博物館の価値向上を地域全体の活性化・再生という切り口から具体的なプログラムの検討を進めて行きたい。

〔林高倫〕

今年度は春先に体調を崩し、持ち直すまでかなりの時間を要した。回復を焦り、立ち直りつつあるところで、再び体調を崩すような日々が続いた。無理をするのは賢明ではないと判断し、冬学期からは休学中である。今年度は、修

士課程2年で、修士課程も最終年度のはずであったため、修士論文で扱う大きなテーマを吟味し、来年度の執筆に生かすこととした。大まかな変更点はテーマ設定を「消防団研究」から「林間学校研究」にした点である。フィールドに住んで得られた観点を生かして当時の資料を論文に反映させつつ、新たに補足調査が必要であれば、現地に足を運ぶ予定である。事例は、福島県伊達市からやって来た子どもたちが、長野県阿智村で過ごした、サマーキャンプの内容である。県内で行われた他事例と比較、自治体職員の貢献など、自分自身の経験も踏まえて、具体的な内容も盛りこんでいきたい。

〔加藤毅典〕

昨年の引き続きとして、初春に社会教育学会研究動向報告の歴史分野を執筆した。また、長野県飯田市におけるフィールド調査報告書の執筆・編集に関わり、同市での発表会に参加した。4月以降は情報学環教育部コンテンツゼミに参加し、コンテンツ文化史学会への聴講やマンガやアニメの著作権を扱う雑誌の記事執筆など、ポップカルチャー分野での学識イベントに複数参加した。夏には長野県小布施町でのフィールド調査、および報告書の執筆に参加。2月には再度飯田市の調査、報告書執筆に参加予定。個人的な社会教育分野の研究としては、三多摩地区の複数の市において公民館活動に参加、特に障害者青年学級での活動を通し、都市部における社会教育施設と公共性、福祉のあり方などを体感。また若い活動参加者の方々や、公民館活動を通して多くの経験をされた年配の方々インタビュー調査をさせていただき、修士論文執筆を進行中。

〔石川洋行〕

本年度は、修士論文（未審査）「バブル期日本における自己の諸相と「自分探し」に関する歴史社会学的研究—雑誌記事を対象として—」及び、論文「アレクサンドル・スクリャービンと共感覚」（比較文学・比較文化論集第29号、2012年3月、査読なし）の2本を上梓しました。目下の研究テーマは以下の通りです。①主に1980年代から90年代までの雑誌記事研究。80年代からバブル期を通じた、雑誌メディアにおける消費の諸相と読者の主体性の変化につ

て研究し、修士論文に収めました。今後はより詳細なタイトル・レトリック分析を含め、より精緻な論理展開を目指して雑誌調査を続けたいと思います。②フランス現代社会思想史研究。主に消費社会と都市の思想を、主体とモノの関係、災厄の思想、及び社会運動との関連・比較の視点から研究しています（本年はアンリ・ルフェーブの主体的唯物論を中心に）。③また、①②にも関連するが、広く1980年代日本社会を通じた文化論の構築を考え、社会学、思想史、社会運動史、メディア論などの領域を学びつつ多面的なアプローチを考えています。

〔劉巍〕

今年度は、修士論文「中国南通市における更俗劇場に関する一考察—平民教育運動の側面として—」の執筆を中心に、1919年から1926年の7年間に存在していた更俗劇場で行われていた演劇活動を研究した。修士論文は啓蒙教育活動の諸相及び更俗劇場の性格と存在意義を明らかにしながら、従来の平民教育運動研究においては欠けていた演劇という視点から、中国の平民教育運動をとらえ直そうとする試みでもある。南通博物苑、張謇研究センター、張謇記念館などを訪問し、張謇研究の関係者に聞き取り調査を実施した。設立理念を含む創設者の思想分析、近代型の施設としての礼儀空間、上演したイベントなどの運営面という三つの角度から論文を展開し、更俗劇場は識字運動と違う方式で平民教育運動を促進する役割を果たしたことを明らかにした。今後、更俗劇場で上演されたイベントや新型劇が当時の一般大衆にどのように受け止められていたかという受容状況について研究を続けていきたい。

〔葛一枝〕

本年度は、4月に修士課程に入学してから、ゼミ・勉強会での議論や文献講読を通じて、専門分野の知識を深めながら、質的研究方法論の勉強に力を入れてきた。このなかで、「学び」の本質について、これまででないほど深く考えさせられたことが、大変ありがたいと思っている。実践活動としては、9月末に長野県飯田市で行ったフィールド実習では、社会教育施設を訪問し、地元の行政や住民から話を聞くととも

に、飯田市の社会教育行政と生涯学習活動の現状を調査した。その中でも特に興味を持っているのは、「南信州飯田おもしろ科学工房」の取組みである。この取組みの現状を踏まえた上で、それによる科学教育の成果および飯田市の地育力向上における役割について検討した結果を報告書にまとめた。さらに、2013年の修士論文執筆に向けて、自分の研究関心である「在職成人に対する学習支援」をめぐる、資料を収集し、先行研究の把握と研究テーマの選定に取り組んでいるところである。

〔胡子裕道〕

本年度は主に研究を行う前段として、見聞を広めることを意識的に行いました。研究テーマとして考えているのは文化と呼ばれる領域であり、文化という言葉は幅の広い意味を持っているということも関わって、上のような意識をもつようにしました。具体的には、①長野県飯田市、長野県小布施町、千葉県柏市、石川県内灘町、といった研究室でお世話になっている地域に足を運び、お話を伺うとともに交流を深め、小布施町・飯田市に関しては報告書にまとめる、②シンポジウムや自主的な研究会などに参加させていただき、交流を深め意見交換を行う、③社会教育や文化というテーマに囚われず、なるべく様々な文献に目を通す、という点が本年度の主な活動です。来年度は修士論文の執筆を予定しており、現在は社会教育の文脈を中心に文化と権利というテーマ、及び両者の関係について、先行研究の整理に着手しています。

〔高野英江〕

私にとってこの一年間は、修士論文のテーマを予定していたものからの変更などを始め、環境の面も気持ちの面も変化の多いものだったと思います。ゼミでの文献購読を通して、社会教育というひとつの視点から現在の社会がどのように成り立っているのかを勉強し、自身の疑問・関心の根源が見えてきたような気がします。そういった意味では、自身の研究の足元を見続けた一年間だったと思います。自分を取り巻く様々な事柄を見つめなおす過程でもあったので混乱した時期もありましたが、研究を深めていくという意味でも必要な過程だったのではないかと思います。また、授業や研究室を

通して訪問した内灘町や飯田市、柏の高柳地区での活動をはじめとする、様々な実践活動に触れることで、自身の社会教育への関心の原点はここにあることも思い返しました。来年度は、修士論文執筆に向けて具体的な行動ができるように思考の焦点をしぼっていかうと思います。

〔西川昇吾〕

今年度は4月より修士課程に入学し、ゼミで社会教育学研究を行う基本的な視点や枠組み、方法論を学びながら、修士論文執筆の準備を進めました。自分の問題意識としてはまず、現在の社会に感じている「生きづらさ」のようなものをどうにかしたいという漠然とした思いがあり、それを研究によってどう形にしていくかということ、この一年は考えてきました。そして特に、これからますます社会が変容していく中で、人々の働き方そのものを抜本的に見直していく必要があるのではないかとというような議論に関心を持ち、自分の研究の大きなテーマにしていくことを決めました。現在は社会教育学分野における労働に関する研究や、関連する他分野の文献を読むなど、研究の基礎固めを行っています。また個人の研究と並行して、飯田市の公民館調査にもメンバーとして加わりました。調査に参加し、成果をまとめる中で、社会教育学的な研究の方法論を身につけていければと考えています。

〔杉浦ちなみ〕

本年度は、4月に修士課程に入学し、主に個人研究、共同研究というかたちで研究に取り組んだ。まず、個人研究としては研究関心である社会教育における表現・文化活動について、幅広い知見に触れながら、具体的なテーマとして卒業論文から引き続き奄美大島のシマウタに注目し、テーマの明確化のため先行研究や関連資料にあたってきた。また、新藤講師の紹介のもと、地域文化研究会への参加をさせていただくことができた。社会教育や表現・文化に関わる理論・実践両面において貴重な学びをさせていただいている。次に、共同研究として、①研究室の飯田市の調査プロジェクトへの参加、②生涯学習基盤調査実習（学部）、社会教育学演習（学部）の授業のなかでそれぞれ、小布施・

長野市への訪問調査，飯田市への訪問調査に参加し，報告書の執筆に取り組んだ。③本紀要に「内灘闘争の目的に関する考察—1953年当時の雑誌記事に着目して—」（胡子裕道・黒田直史と共同執筆）を投稿した。

〔張爽〕

本年度の研究は，主に，文献の通読，修論研究，共同研究の三つを中心に行った。本コースに入学する以前は，主に学校教育・教育政策を中心に勉強・研究してきたため，入学して，生涯学習・社会教育に関する知識や知見は足りないと痛感し，ゼミの内容や関連文献を通読するなど，生涯学習・社会教育に関する知識や知見を広めた。さらに，卒業論文から引き続き関心のある孔子学院を修士論文のテーマするにあたり，価値と意義のある研究にするには，どの側面を取り上げるか，どこを切り口にアプローチするかなどを念頭におきながら，先行研究や関連文献にあたり，孔子学院にも訪問した。また，共同研究に関しては，7月から日本教育学会特別課題である留学生研究に参加させていただき，近年の留学生研究の動向，留学生の生活状況の現状，日本に対する意識の変化など，在日留学生・元留学生の現状や課題について，幅広く知ることができ，非常に良い勉強をさせていただいた。さらに，同研究の最終報告書の調査報告「日本を生きる中国人留学生の現状と課題」の一節，「3. 公費・私費留学生制度と公費・私費留学生の勉学・生活状況に関する考察」を執筆した。

〔黒田直史〕

・飯田市公民館調査への参加

飯田市と大学院牧野研究室の共同研究に参加し，聞き取り調査などを行った。2月に本年度2回目の調査に参加予定である。

・コース紀要への投稿

内灘闘争にまつわる雑誌記事の分析に関する研究を共同でコース紀要へ投稿した。

・東大キッズセミナーへの参加

千葉県柏市高柳地区との共同企画である東大キッズセミナーに参加した。特に「マジック講座」では，講師を務めた。

・内灘町との共同研究

本年度から始まった共同研究のきっかけと

なる調査に学部ゼミの一環で参加した。

・いいだ人形劇フェスタの調査

学部ゼミの一環の飯田市のフィールドワークに参加した。いいだ人形劇フェスタに関して追加調査を行い，年度末に報告書を刊行予定である。

学位論文

博士論文

2012年3月

馬麗華「中国都市部における社区教育政策の動向に関する研究—政府主導型から住民参加型への試み—」

2012年6月

佐藤智子「ローカル・ガバナンスと社会教育の意義に関する研究—コミュニティによるシテイズンシップ学習に向けて—」

修士論文

2013年3月

井田浩之「日本の大学図書館が担う情報リテラシー科目の導入過程」

佐藤優「公立図書館におけるビジネス支援サービス—埼玉県内4市の蔵書調査を通して—」

高橋恵美子「1950年代から2000年にかけての公立高校学校司書の図書館実践—教科との連携と「図書館の自由」の視点から—」

小守美和「千葉県公立高等学校における学校図書館の役割—県立高等学校2校を事例として—」

劉巍「中国南通市における更俗劇場に関する一考察— 平民教育運動の一側面として —」

石川洋行「バブル期日本における自己の諸相と「自分探し」に関する歴史社会学的研究—雑誌記事を対象として—」